

バードリサーチ ニュース

2011年9月号 Vol.8 No.9



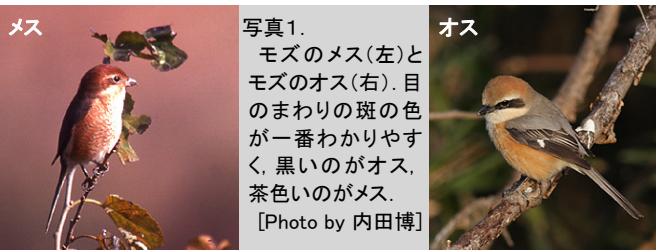
Phalacrocorax carbo
Photo by Watanabe Yoshiro

活動計画

モズ、ジョウビタキ、ルリビタキ 雄雌に注目！

植田陸之

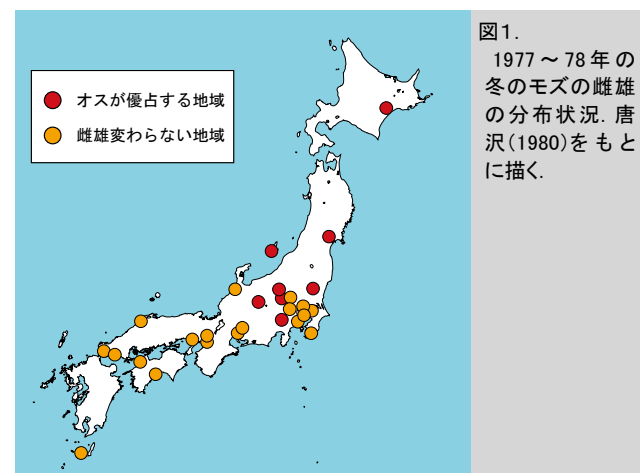
モズの高鳴きが聞こえる時期になってきました。皆さんの家のまわりでも高鳴きが聞こえるのではないかと思います。その鳴いているモズをよく見てください。そのモズはオスでしょうか？ それともメスでしょうか？



雌雄の違いは分布の違い？

1970年代にモズの雌雄比を調べた調査があります(唐沢1980)。それによると北の地方や標高の高い地方など寒さの厳しい場所ではオスの割合が高く、それ以外の地域では差が見られなかったそうです(図1)。おそらく、メスは冬を過ごしやすい温暖な地域に移動するのに対し、オスは次の繁殖期に早くなわばりを構えることができるように、繁殖地あるいは繁殖地に近い場所に無理して残っているため、このようなことが生じるのだと考えられます。

1970年代といえば、ぼくがまだ小さかった頃です。その当時、東京の多摩地域でも厳冬期になれば池にはった氷の上に乗ることができました。ところが最近では薄氷がはる程



度。こんなに冬の寒さが変わってしまった今、モズの雌雄の分布にどのような変化が起きているのでしょうか？

また、北と南、標高の高いところと低いところのような大きなスケールだけでなく、同じ地域の中での雌雄の分布をみるのも面白そうです。多摩地域で観察していると、食物の多そうな農耕地ではオスが多いような気がしますし、食物の少ない住宅地ではメスが多いような気がします。アフリカのボツワナのセアカモズでは、環境の質の高い場所はオスにより占められていて、メスは環境の悪い場所になわばりを構えていることが知られています。モズではどうなのでしょう？ もしモズもそうだったとしたら、雌雄比をモニタリングしていくことにより、その場所の環境の質的な変化もモニタリングもできるかもしれません。

雌雄の分布調査

そこで全国のモズの雌雄の生息状況を調べることになりました。モズだけでなく、同様に雌雄の識別の簡単なジョウビタキ、ルリビタキについても調べてみようと思います。ルリビタキについては季節前線ウォッチの対象種でないのも、もしわかれば初認日もお知らせ下さい。

● 調査の詳細

調査は9月下旬から11月中旬および12月中旬から1月下旬の時期に行ないます。観察した場所およびその場所の簡単な環境とともに、観察した種を雌雄別に報告いただきます。9～11月は鳥たちが定着して、なわばり宣言のために活発に行動して目立ち調査しやすい時期で、12～1月はあまり鳴かなくなり少し調査のしにくい時期ですが、厳冬期の分布を把握するために行ないます。

ご自宅のまわり、鳥見に行った際にメモをとっておいていただき、ぜひご報告ください。

■モズ、ジョウビタキ、ルリビタキ 雌雄調査

<http://www.bird-research.jp/1/osumesu/>

10月29日にはこの雌雄調査をテーマにした【みにクル】も計画しています。場所は東京都八王子市(予定)。決まり次第ホームページで告知いたしますので、こちらの方もご参加ください。

■ミニクルのイベント連絡ページ

http://www.bird-research.jp/1_minikuru/

活動報告

カモ類の渡去時期は 繁殖地の緯度で決まる？ 神山和夫

渡り鳥の調査では日本への飛来時期に関心が集まりがちですが、カモ類の渡去時期を調べてみると面白い傾向が見られたので、ご報告します。

バードリサーチの身近なガンカモ調査と、バードリサーチが事務局をしている環境省のモニタリングサイト1000、渡り鳥飛来状況調査の3つの調査のなかから、月3回以上の調査が行われ、かつ越冬地と考えられる場所の個体数データを使用し、1～5月までの間の最大個体数の30%以下になった時期を渡去時期として調べてみました。すると2008/09年から2010/11年までの3シーズンで、解析対象にした6種のカモすべてについて毎年よく似た傾向が見られました。図は調査地で渡去時期と判定された時期を3シーズン分まとめて表しています。

これらの種の渡去時期と繁殖地の緯度を比べてみると、4

| | マガモ | ホシハジロ | オナガガモ | ヒドリガモ | コガモ | キンクロハジロ |
|------|-----|-------|-------|-------|-----|---------|
| 2月上旬 | 0 | 2 | 3 | 1 | 1 | 0 |
| 中旬 | 2 | 0 | 5 | 1 | 1 | 1 |
| 下旬 | 2 | 2 | 10 | 0 | 4 | 1 |
| 3月上旬 | 8 | 4 | 9 | 6 | 5 | 2 |
| 中旬 | 11 | 9 | 11 | 5 | 3 | 3 |
| 下旬 | 13 | 7 | 5 | 0 | 9 | 2 |
| 4月上旬 | 18 | 7 | 8 | 11 | 7 | 2 |
| 中旬 | 10 | 2 | 2 | 9 | 9 | 6 |
| 下旬 | 1 | 3 | 0 | 11 | 10 | 7 |
| 5月上旬 | 0 | 0 | 0 | 9 | 12 | 5 |
| 中旬 | 0 | 0 | 0 | 3 | 8 | 0 |
| 下旬 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 4 |

図. カモ類の渡去時期と判定された調査地数. 2008/09～2010/11年の3シーズンの渡去時期を合計.

月中に渡去が終わるマガモやホシハジロは繁殖地が比較的南方に位置しています。一方、5月以降まで渡去が続くヒドリガモ、コガモ、キンクロハジロの繁殖地はロシアの南部から北部まで幅広く分布しています。ロシアでは春になると南から雪解けが始まるので、繁殖地が南にある種は繁殖を早くから始めることができるために渡り時期も早めになっているのではないかと。そして繁殖地がロシア南部から北部まで広がっている種では、さまざまな繁殖地からやってきた個体が日本で越冬しているため、2～5月までの長い期間渡りが続くのではないのでしょうか。ただし、4月中に渡りが終息するオナガガモは北極圏まで繁殖地が分布していることや、渡去期が遅い他のカモ類の場合も、雪解けた中継地を経由して渡るのなら遅くまで日本にいらなくてもよいかもしれないため、繁殖地の緯度の他にも渡去時期に影響する要因はありそうです。

渡去時期が3シーズンとも似た傾向にあるということは、気候条件とは無関係に日照時間の変化などによって渡去が始まっている可能性があります。そうだとすると、将来、繁殖地の温暖化が進んだ場合でも、カモ類は繁殖地に到着する時期を気候の変化に適応させることができず、エサになる植物や昆虫などが発生する時期と繁殖時期のタイミングがずれてしまう危険もありそうです。

バードリサーチでは今シーズンも「身近なガンカモ調査」の参加者を募集していますので、詳しくはホームページをご覧ください。

■ 身近なガンカモ調査

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/waterbirds/gankamo/mijikanagankamo.html

お知らせ

バードリサーチ 冬のイベント

● 鳥の学校「論文を書こう」

12月3日～4日に大阪市立自然史博物館で鳥の学校を行ないます。論文をまったく、あるいはほとんど書いたことがないアマチュア研究者や学生で、日本鳥学会、バードリサーチ、大阪市立自然史博物館友の会のいずれかの会員の方が対象です。論文を書く意義、論文で書くべきこと・書いてはいけないことに関する講義、参加メンバーの研究発表とそれをどうやって論文にまとめるかの議論などを行ないます。定員30名程度。参加を希望される方は、以下のホームページをご覧ください。

<http://www.bird-research.jp/1/ronbun>

● モニ1000（森林・草原）鳥類調査研修会

今年も全国5か所でモニタリングサイト1000、森林草原の鳥類調査の研修会を実施します。2日間の日程で、これまでに得られた成果の報告、調査方法の講義や実習を行ないます。開催地と日程は右記のとおりです。

- 北海道旭川市 10月22日(土)PM～23日(日)AM
- 島根県出雲市 11月12日(土)PM～13日(日)AM
- 奈良県奈良市 11月26日(土)PM～27日(日)AM
- 長野県上田市 12月17日(土)PM～18日(日)AM
- 東京都港区 1月実施予定(日程未確定)

詳細は以下のページをご覧ください。

<http://www.wbsj.org/activity/conservation/research-study/monitoring1000/moni1000-training/>

● モニ1000（シギ・チドリ類調査）交流会 東北

今年度のモニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査の交流会を開催いたします。東北の湿地や干潟の紹介、震災による影響、水田地帯のシギ・チドリ類などのテーマで開催する予定です。一般の方も参加できますので、お時間がありましたら、ぜひご参加ください。詳細は以下のホームページをご覧ください。

日時：2011年10月23日 日曜日 10:00～

場所：仙台市戦災復興記念館

http://www.bird-research.jp/1_event/shigichi2011_10.html

【植田睦之・守屋年史】

学会報告

日本鳥学会2011年度大会

今年度の日本鳥学会は、9月16日から19日にかけて、大阪市立大学(大阪市)で開催されました。
バードリサーチに関わった発表をご紹介します。

● 口頭発表

森林性鳥類のさえずりパタン:長期モニタリング手法の検討
○黒沢令子・植田睦之・斎藤馨・石田健

アクセスの悪い高標高地点に設置された無人マイクロフォンの観測システムを利用し、リモート手法により高頻度の観察を行なって、その結果を今後のモニタリングに資するようにパタン化しまとめた。

電柱、館あり～スズメの営巣場所としての電柱の地域差～
○三上修・加藤貴大・三上かつら・松井晋・笠原理恵・森本元・上田恵介

日本におけるスズメの営巣場所のほとんどが、人工構造物にあるといえる。スズメの潜在的な営巣場所である電柱に注目し、その地域差について検討した。

● ポスター発表

キビタキの繁殖ステージとさえずり
○高木憲太郎・宮澤絵里・岡久雄二・森本元

繁殖時期を簡単にモニタリングする手法を開発するために、富士山の原始林において、キビタキの各なわばりオスの繁殖ステージとさえずりの変化との関連性を調査した。

巣はドンドン高くなっていく?
-キビタキの営巣場所選択に対する雄の年齢・経験の影響-
○岡久雄二・高木憲太郎・森本元

オスの年齢と経験によって巣の高さが変化するかを検討することで、オスの加齢に伴い被食率の低い環境に営巣する傾向がオスの繁殖経験によるものか検討した。

低い巣ばかりが襲われる?キビタキの巣に対する捕食の傾向
岡久雄二・○佐々木礼佳・大久保香苗・高木憲太郎・森本元

キビタキの巣に対する捕食の傾向を調査し、巣の環境要素が捕食に影響しているか調査した。結果、捕食に関わる要因は、巣の高さ・巣周辺の植生・繁殖年の3つであった。

渡り性水鳥類の生息分布と保護区域の現状
○三上かつら・高木憲太郎・神山和夫・守屋年史・植田睦之

渡り性水鳥類の全国的な渡来地について個体数と種数を整理し、どの程度の保護区域に指定されているかをGISを利用して解析した。結果、シギ・チドリ類の重要な生息地は保護区に指定されていない場所が多かった。

タカ科のツミは、初列風切をハヤブサ科のように換羽する。
○伊関文隆・佐藤達夫・三上かつら

春期の写真による検証および傷病鳥の羽のマーキング追跡調査によってツミの換羽パターンを明らかにした。そ

の結果、初列風切をハヤブサ科のように、次列風切をタカ科のように換羽することが示唆された。

渡良瀬遊水地におけるオオセッカの生息状況と生息環境
平野敏明

渡良瀬遊水地におけるオオセッカの繁殖期と越冬期の生息状況・選好植生について調査した。結果、高茎植物の生育密度が低く、下層にスゲ類などが繁茂する植生を選好した。また過度のヨシ焼きによる繁殖阻害要因の可能性があった。

神戸市明石川におけるヒクイナの記録個体数の変動
○渡辺美郎・平野敏明

兵庫県明石川で鳴き声再生法を用いてヒクイナの調査を行った。調査地における記録個体数の季節的・経年的な変動について報告した。

● 自由集会

以下の自由集会において、企画したり話題提供をおこないました。

ガンカモ類重要生息地ネットワーク支援・鳥類学研究者グループ:JOGA 第14回集会「東日本大震災の湿地への影響をガンカモ類などの調査を通してどう把握するか」

【話題提供】
市民参加型調査で得られた初認時期と繁殖成績の解析について
神山和夫・守屋年史

— カワウを通して野生生物と人との共存を考える(その14)—
個体数管理をじっくり読み解く
【企画者】高木憲太郎・熊田那央

シギ・チドリ類の長期モニタリングとその活用
【企画者】守屋年史・木本祥太

つばめ研究 最前線
【企画者】北村亘・神山和夫

● 大会に参加して

大会を通じて約500名の参加があったそうです。発表会場もポスター会場も多くの参加者が熱心に話をしていました。鳥の種分化をテーマにした公開シンポジウムも盛況でした。今回も様々な分野の発表がありましたが、個人的には、シギ・チドリ類関係やジオロケータを用いた渡りの追跡や分析の話に興味深く聞きました。節電の影響なのか外に面した長廊下がポスター会場でした。ちょっと暑かったのですが、ウチワが配られていたおかげで、ウチワで扇ぎながらの面白い学会風景になっていました。

来年度は、鳥学会100周年記念大会で、会場は東京大学です。

図. 長い外廊下に貼られたポスター会場。

【守屋年史】

アオバト 英: Japanese Green Pigeon 学: *Treron sieboldii*

1. 分類と形態

分類: ハト目 ハト科

| | | | |
|-----|------------|------------|-----------------|
| 全長 | 315-348mm | | |
| 翼長 | ♂183-196mm | ♀177-187mm | ♂juv. 172-186mm |
| 尾長 | ♂109-133mm | ♀103-123mm | ♂juv. 100-105mm |
| 嘴峰長 | 18-21mm | | |
| ふ蹠長 | 24-28mm | | |
| 体重 | 217-300g | | |

*全長は榎本 1941, 他の成鳥は清棲 1978, 幼鳥(約1.5~2ヶ月齢)はこまたん 2004bによる。

羽色:

雌雄ほぼ同色。オスでは額と喉から胸は緑黄色ないし黄色で、オレンジの強い個体もいる。頭頂から背は暗緑色。中・小雨覆は赤紫で、大雨覆は緑褐色。腹からの体下面は淡い黄白色で、下尾筒は長く幅広い緑灰色の軸斑がある。メスは額と喉から胸はオスに比べて緑色が強く、中・小雨覆に赤紫色はない。雌雄とも嘴は水色で柔らかい。足はピンク。虹彩は外側が赤く、内側が青い(写真1)。また落鳥した成鳥オスの羽根は尾羽14枚を含む4,715枚であった(こまたん 2004a)。



写真1.
成鳥オス
(左)と成鳥メス
(右)。

幼鳥は大雨覆の先端と次列風切の先端に淡黄色の部分が目立ち、2本ないし3本の白い帯に見える(写真2)。巣立ち後、しばらくして照ヶ崎に飛来する幼鳥は成鳥に比べて体全体が小さく、次列風切羽の翼の幅が狭く、尾羽も成鳥に比べ短く飛翔時にも認識できる。いくぶん成長した幼鳥のオスでは雨覆が2~3本の赤紫の部分帯またはまだら模様に見える。その頃には嘴も体の大きさも成鳥に近くなる。幼鳥の嘴は先端の一部あるいは全部がピンク色。



写真2. 幼鳥オス。

鳴き声:

繁殖期によく聞かれ「オーアオー、アーアアー、オーアオー」と尺八あるいはヨーデル(ファルセット)のような声で鳴く。この声には高い声と低い声の2種類がある。また、早口でつぶやくように「ポポポポ...」、「ポーポッポッポッポ...」また「ココココココッ」と鳴く(こまたん 2003a)。神奈川県では「オーオー ゴアッオー、オー、オー、オーアオ、オーアオ、アーアアーオ、オーア、アーアオオ、オーア、オー」がフルフレーズで、野外で距離が離れると前奏部分の「オーオー ゴアッオー」は聞き取れない。

2. 分布と生息環境

分布:

ロシア(サハリン南部)、日本(国後島を含む北海道から九州)、中国南東部、台湾、ベトナム北部に分布する。記

録は大隅諸島、琉球諸島(奄美大島から沖縄島、西表島)、伊豆諸島、小笠原諸島にもある。アオバト属の中で最も北まで分布している(中村 1980)。基亜種(*T. s. sieboldii*)は日本の固有亜種と考えられる(こまたん 2004a, 清棲 1978, Gibbs 2001)。

生息環境:

丘陵地から山地の林に生息する森林性の鳥である。地上では開けた場所に出ることは少ないが、初夏から秋にかけて海岸で群をなして海水を飲む習性がある。本州以南では繁殖期には主に落葉広葉樹林に生息するが、北海道の落葉広葉樹林では少ない(藤巻 1999)。

3. 生活史



繁殖システム:

丹沢山地(神奈川県)の観察では5月中旬から9月中旬の4か月が繁殖期であり、1シーズンに2回の繁殖も可能と考えられる。渡来した4月中旬から5月初旬にかけ、群れで行動し、求愛行動と思われる「ポポポポ...」鳴きや尾羽を上下に振ったり、首を左右に振る求愛行動が5月中見られる。6月の後半にも「ポポポポ...」の鳴き声が聴かれ(こまたん 2003a)、2回目の繁殖が示唆される。

巣:

丹沢山地の観察では、巣は樹高18m、幹の胸高の直径28cmのイヌシデの高さ12mの二股に分かれサルナシの蔓が絡んだ所に造られていた(写真3)。巣は細い小枝が積み重ねられた底の浅い直径約25cmの皿状であった(こまたん 2003a)。巣は見つけるのが非常に難しく、国内の確実な営巣の記録は多くない。



写真3. 築巣場所。

卵:

一腹2卵で、卵の殻は乳白色で無斑(長径29.0-34.5mm × 短径21.0-27.4mm)(清棲 1978)。

抱卵, 育雛期間:

丹沢山地での記録から抱卵期、育雛期とも各約15日と考えられる。雌雄とも抱卵、育雛する。日中の抱卵はオスが多く、メスは早朝には巣に居ることが多かった。抱卵の雌雄の交代は連続的であるが、巣立ち間際には離巣時間が30分の日もあった。

ハト類の育雛の特徴であるピジョンミルク(嗉囊乳)を、ヒナや幼鳥は親鳥の口に頭を入れて摂取する。親鳥は雌雄とも嗉囊乳を与える。また、照ヶ崎での記録から巣立ち後直ぐに海岸には行かず、巣立ち日から約25日以降に照ヶ崎に飛来すると思われる。

渡り:

日本では国後島を含む北海道から九州で繁殖し、北部の個体群は冬に南へ移動する。冬期、北海道での観察例もあるが希である(こまたん 2004a)。

4. 食性と採食行動

植物質を主食とし、主に樹冠部で採食するが非繁殖期(冬期)には、地上や樹上でドングリを採食することも多い(写真4)。繁殖期には主に液果を採食するが、結実前には新芽、蕾や花などを食べる。液果を食べた場合、種子は消化されず排泄されるため、植物の種子散布に貢献している。しかし冬期の餌のドングリでは、種子は消化されるため種子散布に貢献しない(佐々木1986, こまたん1996, 2004a, 2005)。



写真4. 非繁殖期のドングリ地上採餌(京都御苑)。

5. 興味深い生態や行動, 保護上の課題

● 海水の吸飲行動

北海道小樽市張碓や神奈川県大磯町照ヶ崎, 静岡県浜名湖などで、繁殖期に海水を飲む事で有名であるが、海水吸飲の他、北海道美瑛町, 秋田県田沢湖町玉川, 群馬県上野村, 福井県大野市などでは鉱泉水, 温泉水の吸飲が観察されている。他のハト類やフラミンゴ類と同様に下を向いたまま鼻孔も水につけて飲むことができる。なお非繁殖期の海水吸飲の記録は無い。

繁殖期は警戒心が非常に強く、森林内での観察は容易ではない。しかし、海岸、特に照ヶ崎では、アオバトに注意していない人の近くまで降り立つこともある。それでも何羽かは周りを監視している事から警戒心を解いているわけではないので、観察や撮影には節度を持って当たりたい。

海水(塩水)吸飲は、体内のNa-Kバランス(山田常雄ほか1991)をとり体液の浸透圧維持のためとの仮説が有力に思われる。昆虫食をしないアオバトの主食はカリウムを多く含む果実であり、そのため海水吸飲によるナトリウム摂取を行っていると言明されるが、生理学的な実証は今後の課題である(こまたん・加藤2007)。また、照ヶ崎では毎年高波にのまれるが、生命の危険を冒して行われる海水吸飲は、生死に関わる重要な生理的行動であると思われる。

● 人との関わり・狩猟鳥の歴史

人との関わりでは、アオバトには食用乱獲の歴史がある。かつて山野に相当数いた鳥で美味な上、簡単に捕獲できたこともあり、1947年の法改正まで狩猟対象鳥だった。「アオバトは単独で木にとまっている時は警戒心が強く、狙い難い。撃ち損じたら絶対に戻ってこないが、群集すると警戒心が極端に粗漫になる傾向がある」(川口1937)、「(アオバトは)中国関西方面にては肉味なるがため秋季の獲物として多数店頭飾られる」(和田1926)という記録があり、食用目的に捕獲・流通がなされてきた。過去に多くのアオバトが捕獲されていたと考えられ、北米のリョコウバトのように人による乱獲で絶滅が危惧されたことは記憶されて良い(佐々木1986, こまたん2004a)。現在IUCNのレッドリストでは軽度懸念(LC:Least Concern)だが、乱獲や生息地破壊によりその数を大きく減らしたと考えられ、これ以上

の悪化は避けなければならない。

神奈川でのアオバトの保護には繁殖地である丹沢山地、海水吸飲地である照ヶ崎、それらを結ぶ中間緑地帯である大磯・平塚西部丘陵の環境保護が大切である。特にこれまで注目されていない中間緑地帯は移動経路の他、採食や繁殖期の場所としても利用されていることから、山岳地から丘陵、海岸まで面として地域一体の環境保全が重要になる。更に冬期には西日本へ移動し、市街地の神社や都市公園での越冬が知られるが、宮崎県など大磯、京都御苑以外の越冬地の状況は分かっておらず調査を含めた環境保護活動が必要である(こまたん2003b, 2005, 2007)。

6. 引用・参考文献

- Gibbs, D., Barnes, E. & Cox, J. 2001. Pigeons and Doves. A Guide to the Pigeons and Doves of the World. 454-455. Pica Press. UK.
- 榎本佳樹. 1941. 日本産鳥類の体の大きさ. 日本野鳥の会大阪. 大阪.
- 川口孫治郎. 1937. 日本鳥類生態学資料. pp.230-247. 集林書房, 東京.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑・増補新訂版. 講談社. 東京.
- こまたん. 1996. アオバトの糞から検出された植物種子. BINOS 3:1-8.
- こまたん. 2003a. 丹沢山地堂平におけるアオバトの繁殖調査. BINOS 10:1-17.
- こまたん. 2003b. 大磯町西部虫窪地区における冬季のアオバトの観察記録. BINOS 10:99-108.
- こまたん. 2004a. アオバトのふしぎ. HSK, 埼玉.
- こまたん. 2004b. 大磯町照ヶ崎海岸におけるアオバトの幼鳥観察. BINOS 11:1-6.
- こまたん. 2005. 京都御苑のアオバト-2004年秋~2005年春-. BINOS 12:7-35.
- こまたん. 2007. 大磯町照ヶ崎海岸付近の森で泊まるアオバトの確認. BINOS 14:1-13.
- こまたん・加藤千晴. 2007. 神奈川県自然環境保全センターに保護されたアオバトの観察記録2例, 果実食と塩分補給・消化器官の比較について. BINOS 14:15-30.
- 佐々木勇. 1986. あおばと. 自費出版, 札幌.
- 中村一恵. 1980. 神奈川の鳥類相. 日本野鳥の会神奈川支部編神奈川の野鳥. 有隣堂, 横浜.
- 藤巻裕蔵. 1999. 北海道中部・南東部におけるキジバトとアオバトの生息状況. STRIX 17:15-23.
- 山田常雄, 前川文夫, 江上不二夫, 八杉竜一, 小関治男, 古谷雅樹, 日高敏隆 編集. 1991. 岩波生物学辞典 第3版. 岩波書店, 東京.
- 和田干蔵. 1926. 青森県叢書 全集日本動物誌. 講談社, 東京.

執筆者

こまたん

大坂英樹, 金子典芳, 斎藤常實, 田端裕

こまたんは「野鳥を中心に、花や昆虫などを愛でる平塚市・大磯町をフィールドに持つアマチュア・バードウォッチングのグループ」で、初心者に優しく、なんでも楽しみながら、非接触型で自然観察・調査・保護の活動を行う。会則/会費/代表無し。1983年8月に「ハイツ探鳥会」の名称で月一回の探鳥会が開始され、第6回から「こま探鳥会」、第7回目頃から「こまたん」の愛称が登場。2011年8月には第336回を数える。その間、論文を10本発表し、書籍2冊を上梓。



大坂.



斎藤(左)-金子(右).



シーボルトが日本から運んだタイプ標本と田端(オランダ国立自然史博物館で)。

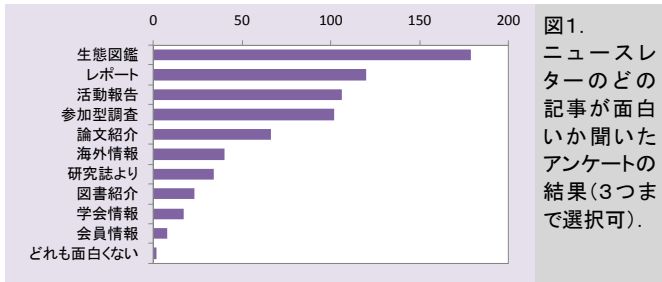
活動報告

鳥学講座アンケート 結果番外編 ～どの記事が面白い?～

高木憲太郎

バードリサーチ鳥学講座についてのアンケート結果のご報告の番外編をお送りします。アンケートの際に、ニュースレターの記事について質問させていただきましたので、その結果をご報告します。

生態図鑑のコーナーは、ニュースレターの記事の中でも力を入れてきました。今月号のアオバトで、まだ83種ですが、ほかにはない情報の詰まった記事にできていると思っています。なので、きっと上位に入っているだろうと期待していました。また、活動報告や参加型調査は、バードリサーチの活動のメインの部分です。この辺の記事の人气が低いようだ、活動の内容や、調査結果のご報告の仕方などを見直さなければなりません。期待半分、不安半分でアンケートの結果を見守っていましたが、ホッとしました。生態図鑑は1位、活動報告と参加型調査も3位と4位に入っ



いました(図1).しかし、活動報告と参加型調査をおさえて2位に入ったのはレポートでした。生態図鑑が種にスポットライトをあてているのに対して、レポートは研究テーマにスポットライトをあてています。鳥の羽根の構造色や絶滅した鳥の脳の大きさなど、異分野の研究を紹介しているのも特徴です。過去のレポート記事の本数は年間6本前後で、去年は9本ありましたが・・・、2011年は上半期で2本と少ないです(図2)。頑張ります。論文紹介は2～4位グループに後れをとっています。最新の面白い研究を取り上げているつもりなのですが、制限のある誌面で、正しく論文の内容を伝えようとするあまり、難しくなってしまうのかもしれない。わかりやすくご紹介できるよう、工夫していきたいと思えます。この他、ほかにもどんな記事が欲しいかお聞きしましたが、鳥の渡りのココが知りたいといったものや、学術用語の解説、研究者やスタッフの顔がわかるもの、調査方法や機材、記録写真の撮り方などテクニックについての記事があると良い、とすご意見を複数の方からいただきました。参考にして、誌面に反映できるよう考えたいと思っています。

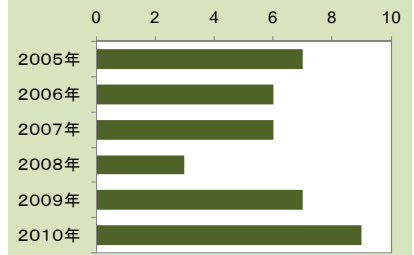


図2. ニュースレターにおける2005年から昨までの年間のレポート記事の本数.

研究誌 Bird Research より

● 今月の新着論文

福島原発の事故の後、再生可能エネルギーへの注目が高まっています。その1つが洋上風力発電です。

これまではコストの問題で日本ではほとんどつくられてきませんでした。地上よりも安定したよい風が吹くという優位性や、低周波騒音などの健康被害の問題から、今後の風力発電の立地地として注目されています。これまで陸上の風力発電所ではオジロワシが衝突するというバードストライクの問題が生じています。洋上ではどうなのでしょう?

植田睦之・馬田勝義・三田長久.
長崎県池島近海における鳥類の飛行高度.
Bird Research 7: S9-S13.

長崎の池島近海を飛行する鳥類の飛行高度を調べたところ、カツオドリやウミネコなどは、おもに風車の高さより低く、小鳥類は風車よりも高い位置を飛ぶためにバードストライクの危険性は低いと考えられました。しかしながら、猛禽類やセグロカモメ、ウミウなどはバードストライクの危険性が考えられました。おそらく飛行高度はその場所が採食地なのか、移動場所なのかによって変わると考えられるので、いろいろな場所でこのような調査が行なわれ、バードストライクの危険性の高い鳥を特定することが重要なことだと思います。また、海鳥のコロニーや渡り経路といった情報のGIS化を行ない、建設を避けるべき場所を公表していくことも、鳥と洋上風力発電との共存のために必要なことだと思います。

【植田睦之】

バードリサーチニュース 2011年9月号 Vol.8 No.9

2011年9月28日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ
〒183-0034 東京都府中市住吉町1-29-9
TEL & FAX 042-401-8661
E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 守屋年史

表紙の写真: カワウ